

国際交流で世界の  
貧困と格差を肌身で知る

「3年次にNGOの関連で1週間、カンボジアにお手伝いに行きました。役に立てたかどうかはわかりませんが、プノンペンにゴミの山があつて、春になるとガスが噴き出たりします。その近辺でプラスチックの廃材を売って生活する人々もいることを知って、ショックを受けました。でも現地では観光ビジネスへの関心が高く、日本語に興味を持つ人が多い。それで日本語の歌を教えたりしました」(国際経済学科3年、菊池雄一朗さん)

専修大学経済学部は、建学以来の歴史を持つ、法学部と並ぶ同大学の看板学部である。経済学科と国際経済学科があり、中でも国際経済学科では学生自身が語学などに興味を持って入学するため、留学も含めて積極的に海外に出ている。また、海外特別研

る程度は豊かな生活がしたい。中途半端はイヤなので、もう少し世界の現場を知るために、国際的に動ける水産関係への就職を考えています」(国際経済学科4年、佐野将史さん)

そうした悩みや葛藤こそが、まさに経済学のベースになると、室井義雄学部長は次のように語るのである。

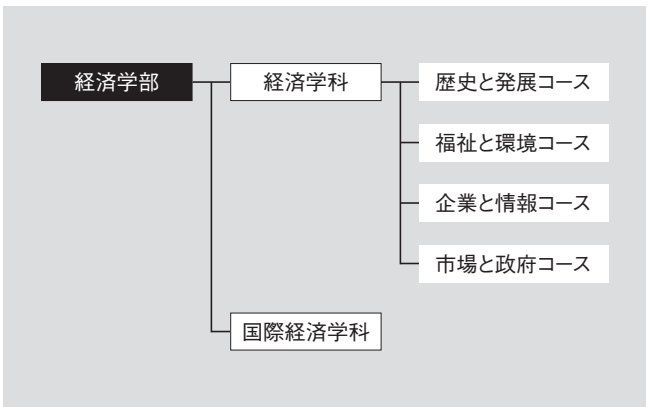
「古代ギリシャ語に由来するエコノミーという言葉は、節約、経済、理法、摂理など多義的に訳されています。それでわかるように、おカネの動きだけを知るものではありません。もっと大きな意味、つまり人間と自然の物質代謝過程を学ぶ領域なのです。具体的には、人間社会における生産・流通・消費・廃棄という経済過程について、歴史・現状・理論という3つの側面から、人間存在にかかわる物質的土台・経済過程のナゾ解きを行うこと。これが経済学を学ぶ上での醍醐味なのです」

ナゾがなければ、そもそもナゾ解きなどできない。問題はあつるにせよ、基本的に豊かな日本や欧米では、それがなかなか見えにくい。アジア、アフリカなど第三世界を体験する、あるいは経済学科の4コースでゼミを通して現代



経済学部 助教授  
飯沼 健子

ただし、そうしたナゾを見つけるためには基礎的な知性や思考力が必要。このため、経済学科では1年次からの半年間の入門ゼミが必修となつている。国際経済学科では選択だが、ほとんどの学生が参加するそうだ。25人弱を1クラスとして、新聞を読み込み、図書館やインターネットなども活用してレポートを作成し、発表するという一連のプロセスの中で、大学での勉強に必要な知的マナーを習得する。



社会のメカニズムを深く理解すること、で、底なしのナゾが見えてくるようになるのである。

1年次から入門ゼミで、  
基礎能力を高める

現代社会と若者たちを活性化する15のキーワード

# 第三世界への視線



専修大学経済学部は、1880年の建学当初からの学部であり、東京大学の「赤門」に対して、専修大学は「黒門」と称されたこともある。明治・大正期には富国強兵の色彩が強く、戦後も経済力の復興が社会的な課題だった学問分野だが、現在では第三世界、特にアジア、ラテンアメリカ、アフリカに眼を向ける学生が増加しているという。



経済学部長  
室井 義雄

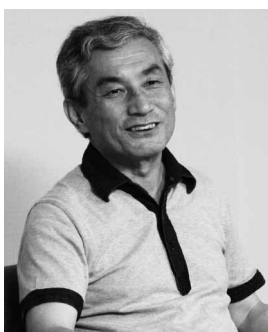
修も実施しており、担当の飯沼健子助教授は「発展途上国の抱える問題を現地の立場から考えることを目指しており、前期は特定の発展途上国について講義・輪読・討論を行い、夏期休暇には実際に現地へ赴き、視察・訪問・調査をします」と語る。

「ラオスやタイに行つて、農村開発やスラム改善に取り組んでいる団体と膝を突き合わせて意見交換もします。ラオスでは農村の集会所や都市の織物工房にホームステイするのですが、学生は皆たくましいですよ。言葉が通じなくても、指1本で意思疎通で

きたりしますからね。国際機関の職員に「ダム建設が承認されたようです。が、地元の人たちは本当に歓迎しているのでしょうか」と鋭い質問が飛び出すことも珍しくありません」(飯沼健子助教授)

経済学科でも、この国際経済学科に刺激されて海外体験する学生も少なくない。カリキュラムでは2年次から「歴史と発展」「福祉と環境」「企業と情報」「市場と政府」の4コースに分かれて、少人数のゼミで徹底的に鍛えられることになる。

専修大学の創立者は米国から最新



経済学部 教授  
八林 秀一

「貧困とは何か、豊かさとは何か。自分にはできないことがいっぱいあることもわかりました。しかし個人的には、あ

の知識と理論を日本に導入したのだが、現代の経済学部は、学生自身で広く世界を知り、かつ深く社会を考えることが特徴といえるのではないだろうか。

人間と自然との  
物質代謝過程を学ぶ

なぜ専修大学を選び、なぜ経済学部に入学したかを3人の学生に聞いた。

**Student Opinion**

佐野将史さん(国際経済学科4年)

「英語に興味があつて、国際系の学部を志望していました。室井教授の入門ゼミに入つて、国際経済だからといって経済学だけに留まらなことがよくわかりました。それで日本を内側だけから見ているのに飽き足りなくなつて、米国に1年間の留学をしました。専修大学の魅力はやはりゼミですね。話し合うことで理解が深まります。そんな基本的なことから、考え方の基礎まで本当に勉強になりました」

北野茜さん(国際経済学科4年)

「小学校から英語を勉強しており、その関係で国際経済に興味を持ちました。英語

菊池雄一朗さん(国際経済学科3年)

「高校時代は理系で、3年の時に数字より人間のほうに興味があることを自覚して、文系に志望を変更。英語を学びたくて国際経済学科を選んだのですが、満足していません。何より幅の広い勉強ができますから。1年次に中国に旅行、2年次にNGOのスタディツアーでメキシコに。3年次にはカンボジアに1週間行って、第三世界の貧困の現状を目の当たりにしました」

「経済学科が大人数教育になりかけた時に、導入教育が必要として発足させました。5月までが勝負であり、最初の夏期休暇を過ぎた頃には全員が一人前の大学生になります。だからこそ海外に出せるわけです。また、経済学科は2年次からコース分けになっているので、その選択に際しても、この入門ゼミが大きな効果を発揮しています」(八林秀一教授)

ちなみに、経済学科の4コースの垣根は低く、他コースの科目履修も自由にできるので、アラカルトで自分なりの専門性を身につけることも可能。親の立場からすれば、いくら勉強の一環でも、カンボジアやアフリカなど第三世界での海外体験は不安に違いない。だが、専修大学経済学部の学生で2年次以上となれば、十分に信頼できる人間力を備えているのである。